

## 古今和歌集聞書

崎村, 弘文  
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/16307>

---

出版情報 : 文献探究. 3, pp.70-73, 1978-09-23. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

資料紹介

古今和歌集聞書

崎村弘文

九州大学文学部国語学国文学研究室の所蔵にかかると、古今和歌集聞書』古写一本を紹介したい。

該本は、早く、昭和一四年に九州帝國大學圖書館（当時）の所有に帰していたのであるが、その後、さまざま事情から、十分に調査されることなく、現在に至っている。この類のものとしてはかなり古い方に属する写本と見られ、今後の調査が期待されるが、筆者としても、その国語資料としての価値に興味があるところであり、以下の如き若干の考察を行なって今後の研究に資することとした。内容についての検討そのほかは、今後の研究に俟ちたいと思う。

該本の書誌、次の通り。袋綴じ三冊（四針眼訂）。各冊、表紙・裏表紙とも青灰色無地のものを用いる。大きさ、いずれも、天地二四・四cm x 左右二〇・〇cm。外題・内題等無し（右に示した『古今和歌集聞書』の名は、箱の表に記すところの

もの）。上冊墨付八三丁、中冊一一六丁、下冊一四九丁。それぞれ、次のような奥書を有する。

【上冊】八二オと八三オ

所一見存分無相違

尤以無比類者歟

文明十四春正月日

宗祇（判）

同十九未六月重聞此説加筆早

（別判）

延徳式庚年三月又聞序十廿卷説

（又判）

全部四十三ヶ度傳授之

哥數千百一首

僧肖柏免一覽間於閑窓寫之訖

最可謂三条家秘説不可有外見者也

如件本加朱點校合早（コノ一行、朱）

永正八年春二月十一日

【中冊】二一五才〜二一六才

前關老人(判)】

同十九 未夏之間重聞此集說如筆早

(判)

奉加一覽早無比類者也

文明十九年六月日 宗祇(判)】

東素傳與書在之

明應五丙七月上中旬之間以祇公聞書

加筆也

(又判)

文龜三癸孟春從十一日至仲春二日

覽之重見合

祇公聞書早為源賴則讀之時也

友以

永正三寅八月至九月廿一日為真存法師

讀之 同然

僧骨柏免一覽間於閑窓寫之訖

最可謂二朱家秘說不可有外見者也

如件本加朱點校合早(コノ一行、朱)

前關老人(判)】

※返り点・送り仮名等、すべて原文のまま。以下同様。

【下冊】一四八才〜一四九才

存分無相違 者也

者也

文明十四曆三月日 宗祇

同十九 未夏之上中下之間重聞此集說如筆早

文龜三癸仲春中旬以祇公聞書與書粗書加之

源賴則傳授之時也

僧骨柏免一覽間於閑窓寫之訖

最可謂二朱家秘說不可有外見者也

如件本加朱點校合早(コノ一行、朱)

前關老人】

すべて一筆に成るものと覚しく、また、各冊の本  
文とも同じ筆と認められる。したがって、この九州  
大学蔵本は、文明一四年(一四八二)に宗祇の証明  
を受けた本そのものではなく、その後幾度かの転写  
を経たものであろうと思われる。與書の内容から判  
断すれば、最後の転写者は、「前關老人」近衛尚通  
かと思われるが、その書き判(花押)の力の無さ、  
筆使いのぎこちなさ等から見て、どうも、そうは言  
えないようである。おそらく、尚通書写にかかると  
本を、それよりやや後の人が新たに転写したものと

思われる。書写年代は、本文の書風そのほかから見て、中世末ないし近世初期か。

各冊の内容について、そのあらましを示せば、次の如くである。

【上冊】

仮名序の聞書（一オ〜三八オ）

卷十　　〃　　（三八ウ〜五〇ウ）

卷二十　〃　　（五一オ〜六七オ）

真名序　〃　　（六七ウ〜八一オ）

※仮名序の聞書から卷三十の聞書までは、

「文明十三（年）九月廿六日」より同「十月三日

」に及ぶ、全六度の聞書である。

【中冊】

卷一の聞書（一オ〜二四ウ）

〃二　　〃　　（三五オ〜四二オ）

〃三　　〃　　（四三オ〜五一オ）

〃四　　〃　　（五一オ〜六八オ）

〃五　　〃　　（六八オ〜八四オ）

〃六　　〃　　（八四オ〜九二オ）

〃七　　〃　　（九三オ〜九九ウ）

〃八　　〃　　（九九ウ〜一〇九ウ）

〃九　　〃　　（一〇九ウ〜一一四ウ）

※「文明十三<sup>丑</sup>八月十八日」より同「九月三日」に

及ぶ、全一五度の聞書。一丁表には、朱筆で「文明十三<sup>丑</sup>八月十八日於種玉／菴受之宗祇禪師」と有る。

【下冊】

卷十一の聞書（一オ〜一五オ）

〃十二　〃　　（一五オ〜二六ウ）

〃十三　〃　　（二六ウ〜三九オ）

〃十四　〃　　（三九ウ〜五四オ）

〃十五　〃　　（五四オ〜七三ウ）

〃十六　〃　　（七三ウ〜八二オ）

〃十七　〃　　（八二オ〜一〇一オ）

〃十八　〃　　（一〇一オ〜一二〇ウ）

〃十九　〃　　（一二〇ウ〜一四七ウ）

※「文明十三<sup>丑</sup>九月一日」より同「廿四日」に及ぶ、

全三三度の聞書。

本文には、朱声点（例、「やまとうたハ……」）、墨声点（「私物のたうび。の給也」）のほか、「〽」の如き濁点（「御師説 おもひしか。がもが也」）、御師説心がへ物にもがハ……）、多数の傍訓（字音注記を含む）等が施されており、国語資料として興味を引くところである。ただし、声点の位置などは、この本が幾度かの転写を経たものである関係上、やはり曖昧なところが目につくようである。秋永一

枝氏『古今和歌集声点本の研究』等の表現を借りれば、「分明。やや不正確。少。」とても言うべきところであろう。なお、各冊の順序について一言しておけば、筆者が、仮名序↓歌集部という『古今和歌集』本文の通常の順序を尊重して、以上の如く排列したのに対し、『聞書』伝授の日付を尊重して、「中」「下」「上」の順に入れ代える、との考え方も有つてしかるべきものと思ふ。この点については、排列順の明らかな他本を参照しなければならぬ。

右の点に関連して、九大本『古今和歌集聞書』の系統につき、これまでに明らかにし得たところを示しておきたいと思ふ。結論から先に述べれば、該本は、へ東常縁↓宗祇↓牡丹花肖柏↓近衛尚通↓と連なる中世古今伝授の流れにおいて生け出された諸書（『古今和歌集兩度聞書』『古今和歌集古聞』『延五秘抄』）と、ごく近い關係に有るものようである。あるいは、もっと具体的に、『延五秘抄』の一本と言つても良いかもしれない。『延五秘抄』は、へ永正八年六月十八日、肖柏の本を前関老人（近衛尚通）が書写したものであり、肖柏の本は、へ文明十三年八月十八日から種玉庵で宗祇禪師から聞書し、十四年正月宗祇の証明を得、へ

その後、聞書を経て加筆したものである（即ち、『古今和歌集古聞』）。その間の事情は、九大本の興書その他にも明らかに示されているのである。筆者は、内閣文庫蔵の『延五秘抄』について詳しく調査してないので、断定的なことは言えないが、九大本『古今和歌集聞書』がこれとごく近い關係に有ることは、ほぼ確實と見て良いであろう。内閣文庫本はへ江戸初期写、卷ニ〇欠とされることから、この方面においても、九大本は十分な調査を期待されることとなる。ただし、九大本は、国語史研究の面からも、中世歌学研究の面からも、同じく興味をそそる資料である、と言つて良いように思ふ。

今後の調査を期待して、紹介の稿をとりこにする（なお、右に挙げたいくつかの文献については、日本古典文学大系『古今和歌集』解説・『国書総目録』各項等参照のこと）。